

## 私の中国戦線での思い出

福島県 遠藤源彌

私は大正十二（一九二三）年三月二十九日、福島県喜多方市関柴町大字上鷹に、父源吾、母竹の後継ぎとして誕生致しました。家は代々農業を家業としてきました。父は日露戦争に応召、騎兵として従軍していたと、子供のころより聞かされておりました。

関柴尋常高等小学校の高等科を卒業しまして、青年学校へと進みました。当時のことでありますので、軍事教練にはたつぷりと時間をかけた教育を受けた訳であります。

昭和十八（一九四三）年七月に徴兵検査を受け、会津連隊区司令官より甲種合格を申し渡されました。そして昭和十九年四月二十日、私は現役兵として仙台東部第二七〇連隊に入隊し、四月二十六日には、朝鮮軍羅南師団、針南山砲隊に入隊とな

りました。当時の朝鮮軍司令官は板垣征四郎閣下でした。

すぐ中支、漢口方面へ移動となり、南京を通過して南支方面へと進み、桂林作戦に参加することとなりました。今思いますと桂林作戦は、転戦につぐ転戦で、私達の隊はいつも殿部隊を引き受けておりました。一門の山砲を曳きながらの行軍は、山また山の連続で、砲の分解、搬送の繰り返しでした。平地では七頭の馬に砲身、車輪等を背負わせて、とにかく進んで参りますが、急斜面では、人力で搬送するしかありません。

ある時上官から、遠藤には特別良い馬を預けるから、良く面倒を見て大事に扱うように言われました。この馬の名は「浄王」と言い夜間行軍で寝入ってしまった際にも、隊に遅れぬように私の袖口を食わえて引き起こすなど、大変良く気のつく馬でありました。

そのころは連日連夜の悪戦苦闘で、兵隊は疲労困憊の連続に新兵の一人が亡くなりました。新潟

県出身者でした。私は隊長より野戦病院行きをすすめられ入院となりましたが、年齢的にも若かったためか、栄養補給と休息のおかげでまた元通りの「しゃん」とした体に戻りました。

またある時、野菜採りに出掛けた折に中国軍の迫撃砲の攻撃を受け、その際、小さな破片が胸に飛び込み、やられたかと手を胸に入れて見ましたが、神仏の加護か幸にして大事に至らず、今は傷あともなく喜んでおります。小さな破片で良かったのですが、でなければあの時一命を失うことになつていたこととなりますが、生死の境とは、ほんのちよつとした距離にあるものですね。

小部隊の我々はいつの間にか、蒋介石軍の国民党軍に包囲され、動きの取れぬ状態となつた時に敵側から、共産軍即ち八路軍と戦うことは、赤化を防ぐための日中同一目的であるので、行動を共にするように要求されました。そして国民党軍と一緒に行動して食事は三度三度食べることが出来ました。

日本軍時代から金銭は一銭の支給も受けませんでした。中国軍からも金銭の支給はありませんでした。約半年間、こうして中国軍と起居を共にし、中国軍の守備する三山を越えて帰ることが出来ました。そして漢口に着いた時は、日本軍の将校も兵も一緒に全く晴れ晴れとした気持ちでした。そのころに私は衛生兵用の薬草倉庫の検査に回り、検品、検査、数量の立会い等に従事しました。

この間一〜二カ月間、一人だけ出向してこの仕事に就きましたが、薬草の臭いが充満している中で、その空気を胸いっぱい吸い込んだ味は格別なものでありました。今も良い思い出のひとつです。

昭和二十二年六月、上海から「米山丸」で九州鹿児島港に入港しました。しかし船中にコレラ患者が出たために一週間港で足止めさせられました。鹿児島で初めて五百円の支給を受けました。これは入隊以来初めて受けた軍隊の給与でありました。その金で握り飯を買って空腹を充たした思い出があります。

昭和二十二年六月二十四日、ようやく我が家に帰りました。大声で「ただいま！」と申しますと、のこのこと出て来た親父に「お前は誰じゃ」と言われてなかなか信用されなかったのです。中国軍の中にいたため消息が絶えていたことによるもので親父さんにも信用されない情けない一幕でした。その時、すでに、役所から本人は戦死者として届けられてきており、まさか死人が帰って来るとは親父にも思えなかったためでした。そして本物の我が子を見て、長時間親父は泣いて喜んでくれました。

同日入隊となった実兄も間もなく七月には帰って来ましたが今でもこの兄は、どこの戦場にいたのか誰にも教えない人でした。私の上の姉は、中国の上海や南京で日本人向けの小学校長の一重長治の妻となりました。次姉は渡辺陸軍少将の妻となった人で、参謀本部や終戦前後の引揚げ関係の仕事に尽力した方です。

ある時、上海で偶然にも実兄と会合しまして義

兄の一重長治校長を訪問しましたが、面会することは出来ませんでした。終戦後内地に帰った一重氏は喜多方市の市議会議長等の要職に就いておりました。私は現在、田畑二町二反を耕作し、主として水田に力を入れています。機械力を使って耕作し、畑は家で食べる程度の野菜を作ります。これ以上畑を増やしますと体の方をこわして仕舞います。会津坂下という地は、歌手として有名であった春日八郎の出身地であります。また、姿三四郎も坂下の人です。

戦後、私は冬期の間、神奈川県藤沢市の長後にあった「いすゞ自動車」で働きました。また千葉県鹿島建設の道路工事に従事したり、羽田空港の拡張工事等にも携わってきました。とくに鹿島建設では上司が会津人でした、大変良く面倒を見て頂きました。農作業（春作業）が終え次第、出来るだけ早く来て欲しいなどといわれました。

私共のこの土地はお米が抜群においしいと思います。周囲の里山から湧き出る水が大変良く、飲

んでもおいしい、その水で育つ稲は一段とうまいお米となる訳です。その上二毛作でなく単作であるため、土も肥えることが原因と思います。

また喜多方はラーメンが有名ですが、戦後、一人の中国人が日本そば屋で下働きしながら、残りのそば粉や小麦粉で、中華風の麺を工夫して中華そば屋を始めました。それが評判を呼び中国から帰還した兵士達がその中国人に弟子入りをしました。かくて技を覚え、この地に広まり、今では喜多方はラーメン王国となりました。私も八十歳を迎え、ついに出稼ぎを止め、自分の田畑の耕作に励んでいます。

中国大陸では濁水を飲んだ訳ですが、これに明礬みょうばんを入れると汚れは沈殿し、澄んだ上水を沸かして飲んでいました。中国兵と迎えた正月は「チヤン耐」で賑やかに振る舞いましたが、現在は酒類は少しもやりません。甘い梅酒が一升あれば、一年ももちますし、疲れた時だけ飲んでおります。

日本に帰ってから、自分で杉山を伐採して生木

のまま家を建てました。十年ぐらいの間に建物の柱などがパチパチと音を立てていました。全く乾燥剤を使わなかったためでした。

子供は男一人、女二人で、家内も丈夫でよく働いてくれます。父源吾は八十六歳で他界しました。自分はこの父以上に生きたく思っております。長生きして留守の間の父の穴埋めをしなくてはとの考えで、家族一同心を合わせて働いております。